

奏太は約3年前に、はじめて栄一と出会ったことを思い出しながら語った。

奏太「原理そのものはおじいちゃんがすでに解明してたからな。実験機自体も複雑なものじゃなかった。この前、小耳にしたんだが、日本に発明王ドクター内藤っているだろ。ドクター内藤に「霊界通信機をつくれないか」って質問した人がいてな。その質問にドクター内藤はこう答えたんだよ。

『霊界通信機？ ああ、あれね、もうできてるよ。通信機をつくるのはけっして難しいことではないよ。ただ問題は、四次元の波長を見つけ出すのがとても難しいんだよね』とね。これって、俺のおじいちゃんと同じことを言ってるよな」

奏太は、ドクター内藤がすでに霊界通信機の本体を発明しつつも、四次元以降の波長を見つけてることが難しいという、奏太のおじいちゃんと同じ段階まで達していたことを説明した。

栄一「へえ、ドクター内藤のことは俺も初耳だな。しかし、奏太。おまえは四次元の世界の波長をキャッチできるセンサーをつくらうと、ずっと実験してきたんだよな」
奏太「おまえでなく、俺たちだろ。俺たち二人の力で解明してきたんだぜ」

栄一「俺は、親父の紹介を受けておまえを手伝っただけさ。ほとんど奏太が考えついたことだろ」

奏太「なに言ってるんだよ。栄一がいなかったらここまで到達できなかったよ」

奏太は、友人として、実験のパートナーとして3年間、栄一が研究を支えてくれたことに心から感謝していた。

栄一「謙遜するなよ」

奏太「俺も偉いこと言えるもんじゃない。四次元との通信手段の原理も俺のおじいちゃんがほとんど解明していたようなものだしな。おじいちゃんが生きていたときは、四次元の波長をキャッチできる部材が存在しなかったけど、栄一の父がそれと似た部材を開発していたからな」

栄一「しかし、奏太のおじいちゃんもおまえも本当にすごいな。俺の親父でさえ、あの部材を霊界通信機の通信手段に使えるなんて考えてもいなかったよ。おおっぴらには言わないが、俺の親父は、おまえのおじいちゃんの実力を認めていたんだぜ」

奏太「おじいちゃんが生きていて、それを聞いたら喜ぶだろうな。秋の研究発表会が楽しみだ」